

ラテンアメリカ諸国の独立

今回学ぶこと

ラテンアメリカでは18世紀末に独立運動が始まった。メキシコでは人々が1810年に立ち上がり、1821年にスペインからの独立を達成した。独立後の重要な政治課題のひとつは、自分たちは誰なのかという「国民アイデンティティー」の確立だった。メキシコでその手がかりとされたのが、16世紀にスペインに滅ぼされたアステカ文明だった。新たな独立の時代を切り拓くために、古い時代がよりどころとなったのだった。

調べておこう・覚えておこう

- 300年にわたるスペイン植民地時代に、メキシコ地方の人口構成にはどのような変化が生じたのか、調べてみよう。
- 18世紀末から19世紀初めにかけて北アメリカやヨーロッパで何が起こっていたのか、ラテンアメリカで広く独立運動が始まったきっかけを調べてみよう。
- メキシコなどラテンアメリカ諸国をはじめ、世界の国々の国旗の図柄にはどのような意味が込められているのか、調べてみよう。

エリート主導の独立運動

スペインやポルトガルなどヨーロッパ諸国の植民地となったラテンアメリカには、入植者や先住民インディオ、アフリカから連れてこられた奴隷などが入り交って暮らしていた。

長い植民地時代を通じ、混血の度合いや身分で区別された複雑な社会階級がつけられ、同じスペイン人でも、植民地に渡来した本国生まれの「ペニンスラール」と植民地で生まれ育った「クリオーリョ」は階級を異にしていた。それより下に位置付けられたのがスペイン人・先住民・アフリカ系住民のさまざまな混血者であり、さらに下層に置かれたのが先住民やアフリカ系奴隷だった。一般に、植民地の「独立」とは多数派の地元の人々が少数派の西洋人による支配を脱することを意味するが、ラテンアメリカ各国の独立運動を推進したのは、植民地社会でエリート層を占めた少数のクリオーリョであることが多かった。

独立後の進路

独立後のメキシコでは、35年間に大統領が55人も代わるほど内政が混乱した。それに乘じてアメリカ合衆国はメキシコ領だったテキサスを併合し、対メキシコ戦争に勝利して、1848年にカリフォルニア、モンタナ、コロラド、ネヴァダ、テキサスなど現在の西部・南部諸州を得た。

ヨーロッパ列強もメキシコに武力介入し、1863年にメキシコシティを占領したフランスは、翌年にはハプスブルク家マクシミリアン大公を皇帝に据えたメキシコ帝国を復活させた。しかしベニート・ホアレス大統領はこれに抵抗し続け、1867年にフランス軍を打ち破って共和政を回復するとともに、改革者として国家の近代化を進めていった。

国民統合とシンボル ～新アステカ主義～

独立直後のメキシコは植民地時代の遺産を数多く抱えていた。そのひとつが、冒頭で述べた人種や文化の違いに基づく複雑な社会階級だった。それをメキシコ独自のアイデンティティーの確立を通じてひとつの「国民」にまとめることが、新国家メキシコには必要だった。

皇帝マクシミリアンは、博物館の整備やメキシコ学の創始を通じて国民統合を進めようとした。マクシミリアン後も、ヨーロッパ文化を社会の基盤としつつ古代アステカにルーツを求める国民統合運動が続いた。「新アステカ主義」と呼ばれたこの運動は、スペインに敗れたとはいえ高い文化的・精神的水準にあったとして古代先住民文明を称賛し、それを他国にない国民の誇りの基盤としようとするものだった。

名前を変えて今日まで続くこの運動は成功したが、それは古代先住民の血筋を引く社会経済的に下層を占めていた当時の先住民や混血者（メスティーソ）を非近代的な人々として切り捨てるという矛盾をはらむ運動でもあった。

